

「学力低下問題」に思う

センター協力研究員（大和市立下和田小学校教諭） 松 義 一 樹

私は、第2回の研究会から参加させていただいたので、趣旨を充分理解しているわけではないのですが、「学力低下問題」は特定の能力開発のための特別な課題なのか、多くの市民を育てるための一般的な課題なのか、そこを区別して考えなければ混乱すると思います。特定の能力開発のために問題にするならば、それは特定の場で論じればすむことでありますし、多くの市民にとって学力が低下していくならば、それは、学校教育全般の大きな課題となるからです。私は、現場感覚として、数年前から多くの市民にとって学力が低下していく危惧感を覚えています。例えば、漢字を書く力や計算力が落ちていることなどは多く指摘されていますが、きちんとノートを取る、しっかりとした図を描く、はっきりと文章を読むなども落ちてきています。その要因の一つは、「新しい学力観」というものが出現し、それに盛り込まれた個性化教育が現場で優先的に扱われたことにあると思います。個性も基礎学力であるといった扱いです。教科書も同じように作られている部分もあります。個性を伸ばすことそれ自体は悪いことではありません。「新しい学力観」以前も個性を育てようとして様々な試みをしてきましたし、これからもそのような試みは続くでしょう。しかし、その時点では、個性を優先するあまり子どもに何を定着させるかが曖昧になったきらいがあります。極端な言い方をすれば、子どもの好き嫌いで学習の方向づけがなされた感じです。そのために、学力差が生じ、全体的には学力が低下していくようなことが起こって来ているのだと思います。この以前から持っていた学力低下の現場感覚とこの研究会との偶然な出会いは、教育の連関性を強く感じます。

この研究会に参加したきっかけは、志水先生の研究に関係するあるボランティアグループに出席させていただいたことからです。本校には、外国籍の子どもが多く在籍し、外国籍の子どもの学力をどう保障するかが校内でも問題にされていました。学力保障は、彼らの自信や自立とも関係するので、学力保障の問題とともに、彼らの自信と自立を確立する方策も立てなければならぬと考

えていました。それが学校の内側から育ち、次第に外側へと広がり、両方の動きが連動すればしっかりしたものになるだろう。また、自信と自立の永続性をも持ちうるだろう。そのような仮説も持っていました。その時、外国籍の子どもを集めて学習教室を開いているこのボランティアグループに出会ったのです。こうした少しのきっかけが、学力保障問題と学力低下問題に結び付いたのです。

外国籍の子どもの学力保障は何故に必要か。自信と自立は何故に必要か。それは、生活を円滑に進めるとか、豊かにするというのではなく、まずは、日本という他の国で、永い期間住み続けるために不利益を被らないように、あるいは公正に物事を判断する市民としての力をつけることでしょう。そのためには、周りからの支援や援助も必要でしょうが、基盤は、自信と自立です。こう考えたとき、これは何も外国籍の子どもに限ったことではない。学力を身につけることは、どの子にとっても、将来不利に生きることがないように、あるいは公正に物事を判断できるようにすることなのです。要するに、多くの市民として自立することなのです。その意味を付与したとき、学校における教科の基礎学力は大きな意味を持ってくるのです。言い換えれば、学校の大きな役割の一つとなるわけです。この前提に立つと、現場感覚として持つ「多くの市民の学力低下を招く」ような状況は、大きな問題なのです。

こうした思いを持った上で、この研究会に参加させていただいたことは大変貴重な体験でした。特に『イギリスにおける教育改革と学力問題』は大いに参考になりました。どの子も、生きていくために不利益を被らず、公正に物事を判断し、自立した市民へと成長するためにどのような基礎学力が必要なのか、学校はどのようなことをしなければならぬのかは絶えず検証されなくてはならないと思います。それには、どこかで、基準や検証システムづくりをしなければなりません。今回の貴重な経験をもとに、学校現場の感覚で細々と考えを巡らしていきたいと思っています。